急救危、切於己、逢旱澇、不待延請、祈求修法、屢有感應、問疾餉餓、存活之者多、俗號悲增大士、○中略

釋光勝不言姓氏、爲沙彌時、自稱空也、人又不諱言空也、少好佚遊、天下殆遍、所過道塗多爲利濟、荷鋤鏟、嶮拾石鋪濕、架破橋、修廢寺、無水之地多穿井、井必甘冷、以其常唱彌陀號、俗名彌陀井、往往而在焉、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年○貞永元年七月十二日、今日勸進聖人往阿彌陀佛、就申請爲無舟船著岸頻、可築和賀江島之由云云、武州○北條泰時殊御歡喜、令合力給、諸人又助成云云、八月九日、和賀江島終其功、

〔東關紀行〕ほむの川原○河三にうち出たれば、○略中茂れるさゝ原の中に、あまたふみわけたる道ありて、行末もまよひぬべきに、古武藏の前司、○北條泰時道のたよりの輩に仰て、植をかれたる柳も、いまだ陰とたのむまではなけれども、かつ〳〵まづ道のしるべとなれるもあはれなり、○略下

〔先哲叢談二〕野中止、字良繼、小字傳右衞門、號兼山、○略中

嘗來江戸、及歸期也、致書鄉人曰、土佐無物不有、自江戸齎歸、惟有蛤蜊一艘耳、海路幸無恙、以歸日饋之、衆以爲嘗異味、計日待歸、既至則命投其所漕於城下海中、不餘一箇、衆怪問、兼山笑曰、此不獨饋諸卿、使卿子孫亦飫之也、自此後、果多生蛤蜊、遂爲名產、衆始服其遠慮、

〔孝義錄三十九紀伊〕奇特者名廻次郎右衞門

名廻次郎右衞門は伊都郡東富貴村にて、高七十石もてる百姓なり、正德四年より享保三年にいたるまて、村の中困窮し、山中の事なれば田畑も猪鹿に踏あらされしを、次郎右衞門力をくはへて、さま〳〵にふせぎしが、猶もさゝへかねて、此地を領せる高野山の年預坊のもとに、しば〳〵かよひて、一村のために年の貢をゆるべん事をこひしかば、次の年よりして、田宅より出る定をもゆるしけり、富貴村に池なくして、人々なやみけれど、あながちにいひ出るものもなかりしを、次郎右衞門が志にめで、同十年正月、次郎右衞門を年預坊によびて、新たに池ほる事をゆるし、